

場面に見る文化的装い方の日英語比較

近藤 富英

1. はじめに

私たちは日常さまざまな場面でコミュニケーションを行っているが、言語行動とその文化的前提において、それぞれの文化にはさまざまな場面において、望ましく期待されているコミュニケーション行動というものがある。たとえば、アメリカではお客の方が買い物のあと店員に対して thank you と言うことが多いし、誉め言葉に対しては謙遜するよりもやはり thank you と言って受け入れることが多い。日本人はスピーチの折りなどにはユーモアを使うよりは、まず自分がいかんではないかという謝罪から始めることが多い。また年賀状などでも「今年も宜しく申し上げます」などと相手に（実際はともかく）頼っていることを強調する文面が普通である。それに対して英語のクリスマスカードの場合は相手のクリスマスと新年が素晴らしいものであることを願うのが普通である。それらはその文化の価値観や行動原理を反映したいわばコミュニケーションを円滑に行うための「文化的装い方」であり、その文化の構成員によって半無意識的に学ばれてきたものが多い。従って自分の属する文化内ではあまり意識しないことがらであるが、ひとたび異文化に接触した場合は切実な問題と成り得るのである。

本稿は、英語のドラマを基にして、どのような場合がより英語らしい場面として認識されるのか、あるいはされないのかをいくつかの場面から導き出し、さらにその理由を考察するとともに、それらの英語教育への応用の可能性を探るものである。

2. 資料と調査方法

2.1 資料

資料としてはアメリカのテレビドラマ『大草原の小さな家』(A Little House on the Prairie)の中からの1話「ある医師」(Dark Sage)のスク립トを用いた。このエピソードのあらすじは以下の通りである。

ウォルナット・グローブの町で長年医師を勤める Dr. Baker は、仕事が忙しくなり新しい手伝いの医師を求める広告を出し、応募してきた Dr. Ledoux を雇う。しかし Dr. Ledoux が黒人だったため、町の人々からさまざまな偏見を受ける。ある時、Dr. Ledoux は黒人を嫌う白人の農夫の奥さんとその赤ちゃんの命を助けるが、結局この町ではやっていけないと感じ、彼とその妻 Mattie は町を出ていく決心をする。町を去る当日の朝、Dr. Baker は教会で町の人を前にして、じつは自分自身も黒人の医師に対して偏見を持っていたことを告白する。あらためて Dr. Baker は Dr. Ledoux に謝罪し、この町にとどまることをお願いし、Dr. Ledoux はそれを受け入れる。正味 40 分程のエピソードであるが、さまざまなコミュニケーション行動が登場

し、場面分析には適していると思われる。

2. 2 調査方法

上記の英語ドラマのエピソードから特徴的な 20 場面を選び出す。「特徴的な」というのは、たとえば「慰めの場面」というふうに、明らかに分類できそうなものと、言葉使いなどを通して文化的な振る舞い方を反映しそうだと思われる場面である。選び出した場面は以下の通りであり、内容は主にコミュニケーション行動の起こる場面、機能、言葉使い、さらに文化を反映したものからなっているが、エピソードの中での登場順に並べてある。

(1)依頼 (2)いとまごい (3)出会い (4)紹介 (5)すすめる (6)話題の転換 (7)言葉使い(その1)
(8)言葉使い(その2) (9)文化関係 (10)謝罪 (11)慰める (12)言葉使い(その3) (13)言葉使い(その4)
(14)ユーモア (15)誤解 (16)招待 (17)約束 (18)争い (19)言葉使い(その5) (20)受け止め。

以上の抽出した 20 場面を前後関係がわかる範囲に引用し、英語での情報内容を忠実に盛りながら、かつ出来るだけ日本語らしい言い回しに翻訳する。実際は 20 の場面はすべて英語のドラマからのものであるが、インフォーマントにはそのことを知らせず、それぞれが英語の場面を基にしたものか、それともともとも日本語の場面であったと思うか判断してもらい、その理由も記してもらおう。インフォーマントは 55 名の大学生である。

3. 結果

日英語のどちらのドラマと
思ったかの人数と割合は以下のとおりである。
日本語の会話場面を見て、
本来は英語のドラマだろうと
推量できたのは、もっとも
高い正答率が(2)の「いとまごい」
の 89.1% であった。英語の
場面だと答えたものを正解と
すると(実際そのとおりなの
だが)、50%以上の正答率は
20 場面中 12 場面であった。
その 12 場面中 70%以上の
正答率があったものは 7
場面であった。逆に日本語の
ドラマであろうと思った
割合が 50%以上であった
ものが 8 場

日英のどちらのドラマと
思ったかの人数と割合 (55 人中)

場 面	日本語のドラマ	英語のドラマ
(1) 依頼	14 人 (25.5%)	41 人 (74.5%)
(2) いとまごい	5 (9.1)	49 (89.1)
(3) 出会い	36 (65.5)	14 (25.5)
(4) 紹介	12 (21.8)	38 (69.1)
(5) すすめる	20 (36.4)	32 (58.2)
(6) 話題の転換	41 (56.4)	20 (36.4)
(7) 言葉使い(その1)	16 (29.1)	39 (70.9)
(8) 言葉使い(その2)	9 (16.4)	46 (83.4)
(9) 文化	15 (27.3)	36 (65.5)
(10) 謝罪	33 (60.0)	17 (30.9)
(11) 慰める	32 (58.2)	18 (32.7)
(12) 言葉使い(その3)	5 (9.1)	46 (83.6)
(13) 言葉使い(その4)	13 (23.7)	39 (70.9)
(14) ユーモア	6 (10.9)	47 (85.5)
(15) 誤解	29 (52.7)	23 (41.2)
(16) 招待	10 (18.2)	39 (70.9)
(17) 約束	31 (56.4)	22 (40.0)
(18) 争い	24 (43.6)	27 (49.1)
(19) 言葉使い(その5)	25 (45.5)	26 (47.3)
(20) 受け止め	21 (38.2)	30 (54.5)

面であった。英語・日本語を問わず一方が50%台で比較的拮抗していると思われるものは7場面あった。なお、日本語のドラマだと思った割合と英語のドラマだと思った割合を合計しても100%にならないのは、「決められない」という項目を選んだインフォーマントがいたからである。

4. 考察

最初にそれぞれの項目について、実際の場面を示しながら考察を行う。日本語の場面に出てくる「○○」は人の名前の代わりに使用したもので、英語の名前がカタカナで示されると即座に英語のドラマとわかることを防ぐためである。「○○」のあとのFNはファーストネーム、LAはラストネーム、BN (both names) は名字と名前の両方をそれぞれ示し、Tは「先生」などのタイトルを表している。インフォーマントに答えてもらう際には、それが何を表すか充分に説明を行ってある。実際の英語の会話を、調査に用いた日本語のあとに参考までに示してある。

(1) 依頼 (英語のドラマだと思った割合: 74.5%)

A: 先生、来てくれませんか? ○○ (Bの奥さんのFN) が怪我をしたんです。

B: カバンを取ってこよう。

C: たいしたことないといいんですけど。

A: なに大丈夫ですよ。くるぶしをちょっとひねっただけですから。

C: お大事にと伝えて下さい。

A: 有り難う、○○ (BのFN)。ご親切様に。

A: Oh, doc! Can you come right away? Harriet's hurt herself.

B: I'll get my bag.

C: I hope it's nothing serious.

A: Oh, I don't think so. It's just her ankle.

C: Well, you tell her we send our sympathy.

A: Oh, thank you Jenny. That's very nice of you.

これは5番目に正答率が高かった(74.5%)が、これはまずAが自分の奥さんのことを言うのにFNが用いていることと、Bに対して呼びかけるのにやはりFNを使っていることが決め手になったようである。あとAが依頼を行う前に「済みませんが」などの言葉が無いのも英語のドラマと判断された理由のようであった。

(2) いとまごい (英語のドラマだと思った割合: 89.1%)

A: ○○ (BのFN)。

- B : ○○ (A の FN)。
 C : さあ行こう、○○ (B の FN)。

- A : Nelse.
 B : Nathan.
 C : Let's go, Nelse.

これは正答率が 89.1 % で一番正答率が高かったが、直接的に名前だけを言うことによって別れの言葉にしているのが、英語のドラマと判断された理由である。英語では名前を発話の前後に付けると同時に、日本語と較べて名前のみで挨拶を行うことも多いようである。

(3) 出会い (英語のドラマだと思った割合 : 25.5 %)

- A : はい、何か御用でも。
 B : ○○先生 (A の BN + T) ですか。
 A : ええ。
 B : ○○です (自分の BN)。○○です (自分の BN + T)。たしか待っていてくれたのではと思いますが。
 A : Yes, is there something I can do for you?
 B : Yes, are you Dr. Harim Baker?
 A : Yes.
 B : I'm Caleb Ledoux. Dr. Caleb Ledoux. I believe you are expecting me.

これはBが「先生」と言っている (英語では Dr.) ので日本語のやりとりと思われたようだ。職業名 (この場合は「先生」) を名前に付けたり職業名や役職名で話し相手に呼びかけるのは日本語の特徴のひとつでもあるからであろう。

(4) 紹介 (英語のドラマだと思った割合 : 69.1 %)

- A : ああ、紹介します。こちら妻の○○ (FN) です。
 B : ○○ (FN)
 C : 先生。
 A : Ah, thank you. Dr. Baker, this my wife, Mattie.
 B : Mattie.
 C : Doctor.

これは自分の妻を相手に紹介する場面であるが、紹介されたほうが FN だけで応答している。

これが英語のドラマを基にしたと思った正答率が 69.1 % になった理由だと思われる。

(5) すずめる (英語のドラマだと思った割合 : 58.2 %)

A : びしょ濡れでしょう。さあ、濡れたコートを脱いで、お掛け下さい。

B : ああ、どうも。

A : コーヒーはどうですか。

B : いいですね。有り難うございます。

A : 身体があつたまるはずですよ。

A : Oh, you must be soaked to the skin. Why don't you take off those wet coats and sit down?

B : Thank you.

A : How about a cup of coffee?

B : That would be fine. Thanks a lot.

A : This ought to wind you both up.

英語のドラマだと思った割合は、日本語のドラマだと思った割合 36.4 % に対して 58.2 % であり相対的にやや拮抗していた。日本語の会話としても充分通じる「すすめ方」になっていたのが、その理由であろうが、やや英語が優勢だったのは、すすめているものがコーヒーだからかもしれない。日本語では普通はコーヒーの代わりに「お茶はどうですか」とすすめるのが一般的かもしれないからである。

(6) 話題の転換 (英語のドラマだと思った割合 : 36.4 %)

A : 有り難うございます。

B : 有り難うございます。

A : 私の資格証明書に問題はないと思いますが。

B : ああ、まったく大丈夫です。

A : Thank you.

B : Thank you.

A : I assume you found my credentials in order.

B : Oh, yes, yes, yes, indeed.

これも拮抗した例であるが、56.4 % とやや日本語のドラマだと思った割合が高かった。とくに「ところで」などの話題転換のための言葉を使わなくても日英語で話題が転換できる例もありどちらの言語でもあまり違和感はなかったようである。

(7) 言葉使い (その1) (英語のドラマだと思った割合: 70.9%)

- A: 普通より学校を出るのに余計時間がかかったのは認めます。でもエネルギーなら充分あります。ここで働けるなら力一杯やりますよ。
- B: 手紙にも書いたように、収入の方は自分の診た患者の診療費だけなんだが。せいぜいそれぐらいしかできないが。
- A: ええ、それで公平だと思います。
- A: Well, I admit it took me longer than most to get through school, but I have plenty of energy, believe me. I'm ready to take on the world if you give me the chance.
- B: Well, as I said in my letter, your salary will have to come from the patients you treat. I'm afraid that's the best I can do.
- A: That's fair enough.

この例は70.9%の正答率であったが、これはBの最後の言葉「それで公平だと思いますよ」と言う言葉に英語らしさを感じたようである。日本語では一般的に相手を高め自分をへりくだる言語行動が普通であり「それで充分だと思います」と答えそうな場面である。公平かどうかという観点で物事を捉えようとするのは日本語というより英語的発想と言える。

(8) 言葉使い (その2) (英語のドラマだと思った割合: 83.4%)

- A: 足首をどうされました。
- B: 足首? 足首? いえ、あたしじゃないんです。うちのおじなんです。今朝、お腹の調子が悪くて。ただガスがたまっただと思います。今頃はもう大丈夫だと思います。お会い出来て本当に嬉しかったですわ。
- A: Now what seems to be wrong with your ankle? Uh?
- B: My ank..my ankle, oh, oh, no. No, oh, no, no, my ankle, my uncle. It's..it's my uncle. He had a very upset stomach this morning, ah, I'm sure it was just a...gas. Ah, I'm sure that he is fine now, well, it was such a pleasure to meet you, Dr. Ledoux.

英語の原文では ankle と uncle が洒落になっているが、日本語では「足首」と「叔父」ということで言葉の面白味を伝えることはできない。その意味不明さゆえに英語のドラマを基にしたと答えた割合が83.4%になったようだ。またお腹の調子が悪いときに日本語では「ガス」と言うよりは「お腹がはる」と言うほうが一般的であろう。文化によって好まれる表現や行動があるものである。

(9) 文化関連 (英語のドラマだと思った割合: 65.5%)

- A : 春には年に一度のピクニックをやります。信者達のための特別なものです。
- B : 楽しそうですね。
- A : ああ、〇〇 (C の LN + T)。
- C : ああ、〇〇 (LN) 牧師。
- A : 君の新しいお仲間と奥さんに会ったところだよ。嬉しいことにこちら教会の一員になってくれるそうだ。どうだろう。今度の日曜日に君からみんなに紹介してくれると嬉しいんだが。
- A : And we have our annual picnic social in the spring. It's a very special outing for the congregation.
- B : That sounds very nice.
- A : Well, Dr. Baker.
- C : Rev. Alden.
- A : I have just met your new associate and his wife. And I'm happy to report that they are looking forward to becoming part of our congregation. Do you know, it might be a nice idea if you were to introduce them yourself to the congregation.

この例に対しては 65.5 % の正答率であったが、「信者達」、「教会」、「牧師」などの言葉が英語的雰囲気を出していると言える。「信者達とピクニック」というのも日本では普通はあまり馴染みの無いものであろう。もちろん日本にも無いわけではないが、やや文化特有の語彙や活動は英語のドラマと判断される傾向がある。

(10) 謝罪 (英語のドラマだと思った割合 : 30.9 %)

- A : 馬の治療をするために私をやったんですか。
- B : ああ。
- A : 私は馬や牛の病気を診るために長いこと医学校で勉強したんじゃないありません。
- B : ほう、君は言ったはずだよ。田舎の医者がどんなものか知っているかね。だが、知らないようだね。いいかね。こういうところの医者は時には人間だけではなく、獣医代わりに馬や牛や豚の治療もしなければならぬんだ。もし、動物など診るのは誇りが許さないというのなら、ここにいる必要はないね。都会に戻るんだ。〇〇 (都市の名前) に行けば、大病院もたくさんある。君ほどの資格を持っていればどこだって喜んで迎えるだろう。
- A : とんだ思い違いをしていたようです。
- B : 雌馬はどうだった？
- A : 大丈夫でした。あちこちで不当な扱いを受けるもんですからひがむ癖がついて。どうも、私の誤解でした。許して下さい。
- A : You sent me out to take care of a horse?

- B : Yes.
- A : I didn't study all those years to become a doctor to take care of horses and cows.
- B : Well, you told me you knew what being a country doctor was all about. Now obviously you don't. You see we country doctor, we take care of as many horses and cows and pigs and sheep as people, sometimes. Now if you are too proud to tend to livestock when they need it, well, you just tell me? You can go back to the city. Minneapolis has a lot of fine hospitals that would love to have someone with your splendid qualifications.
- A : I guess I jumped to the wrong conclusion.
- B : How's the mare?
- A : Fine. I guess when a man gets used to being treated in a certain way, he comes to look for it. I.I misjudged you. I'm sorry.

これは実は予想していた答えと反対の結果になった。ふたつ目のAの台詞「とんだ思い違いをしていたようです」など、自分の非がわかった時点で素直に謝罪している点から見て、英語のドラマと判断されると思っていたのだが、日本語のドラマだと思った割合のほうがやや多く60.0%であった。英語では意見を変えることはたいした恥ではなく、説得されれば考えを変えることも大人の判断と見なされるのが普通だからである。しかし、日本語としても会話の流れが自然でありまた引用部分が若干長すぎたのか、予想を反して日本語のドラマだとする意見がやや多かった。

(ii) 慰める (英語のドラマだと思った割合 : 32.7%)

- A : どうも僕はここの暮らしに期待を持ちすぎていたよ。苦勞して学校を出たろ。薔薇色の人生があるような気がしていた。
- B : 薔薇色とはいかないけど、悪くないわ。
- A : これから大変になる、〇〇 (BのFN)。みんなの信頼を得て患者を増やすまでにこれから先何年もかかるよ。
- B : あっと、気が付いたら、さばききれないくらいほど患者が増えてるわ。
- A : 君くらいに思えるたらいいんだけど。
- A : I guess I put too much thought in coming here after all those years of working and going to school. I guess that I thought this was going to be like paradise.
- B : Well, it may not be paradise, but it is nice.
- A : This is going to be a lot of hard work, Mattie. More years of struggling trying to get people to believe in me.
- B : Oh, before long, you are going to have more patients than you know what to do with.
- A : Well, I wish I could be as sure as you are.

これも比較的拮抗した例であるがやや日本語のドラマとされた割合が高く58.2%であつ

た。たしかに怒めている場面なのであるが日英どちらの特徴もあまり出なかったのが拮抗した原因のようである。

(12) 言葉使い (その3) (英語のドラマだと思った割合: 83.6%)

A: もうひとつ言わせて。

B: 何だい。

A: とてのご立派よ。〇〇先生 (BのLN+T)。

B: 〇〇 (T+AのLN)。そろそろ町へ出て派手にやりますか。

A: And another thing.

B: What's that?

A: You look very distinguished, Dr. Ledoux.

B: Well, madam Ledoux, I believe it's time that we go down and add a little color to this town.

日本文化では夫婦同士では普通は誉め合うことはあまり無いといえるが、この例においてはAが夫に向かって「とても立派よ。〇〇先生」と言っている。インフォーマントには夫婦の会話だということは教えてある。従って英語のドラマを基にした会話だと判断した割合が83.6%になったと思われる。また夫が「派手にやりますか」と少しおどけて言っているが、これも日本の夫とは判断されなかったほうである。

(13) 言葉使い (その4) (英語のドラマだと思った割合: 70.9%)

A: 届けてあげたら。手間を省いてあげたら。

B: 手間を省いてあげたくないのかもしれないね。

A: 〇〇 (BのFN)、あなた彼を公平に見ないで非難しようとしているわ。

B: わかりました、奥様。すぐに届けますよ。

A: 〇〇 (BのFN)。

B: なんだい。

A: 黒いカバンを持たないお医者様はお医者様じゃないわ。

B: ああ、近いうちに開けることでもあるかな。

A: Why don't you take it up there? Save him a trip.

B: Maybe I don't want to save him a trip.

A: You are convicting that man without giving him a fair trial, Caleb.

B: All right, woman. I'll take the medicine out there.

A: Caleb.

B: What?

- A : A doctor just isn't a doctor without his black bag.
 B : Yeah, maybe one of these days, I'll have a reason to open.

やはりこの会話でも妻であるAが、「あなた彼を公平に見ない」というぐあいに「公平」さが大事だということを訴えている点が英語的と言える。英語のドラマを基にしたと考えた割合は70.9%であった。ここでも夫であるBは「わかりました、奥様。すぐに届けますよ」とおどけているが、このユーモア的な感覚も英語的と判断された理由のようである。

(14) ユーモア (英語のドラマだと思った割合 : 85.5%)

- A : ○○先生 (BのLN+T)。○○ (AのBN) です。この間、教会でちょっとだけお会いしましたね。
 B : ああ、覚えてますよ。それでこちらにいるのは誰かな?
 A : 娘の○○ (CのFN) です。3塁に滑り込んだとかで。
 B : おやおや、でセーフになったの?
 C : はい。
 B : じゃあ名誉のかすり傷だ。さあ、手当てをしよう。
 C : 痛いですか?
 B : 本当のことを知りたい。
 C : はい、先生。
 B : ちっとも痛くないよ。
- A : Dr. Ledoux! Hi! How are you? I'm Charles Ingalls. We met briefly at church the other day.
 B : Ah, yes, I remember. And who do we have here?
 A : Yes, my daughter, Cassandra, and she had a little run in with third base.
 B : My, my. I hope you were safe.
 C : I was.
 B : Good. Then it was worth it, huh?
 C : Will it hurt?
 B : You want the truth?
 C : Yes, sir.
 B : No, it won't hurt a bit.

この場面は85.5%が基のドラマは英語だと答えている。草野球で三塁に滑り込んで怪我をしたCに対して、医者であるBは、「セーフになったの」と聞き、セーフになったとわかると「名誉のかすり傷だ」と応えている。日本語の文脈なら「大丈夫なの」と聞きそうで、ふだんからリラックスな雰囲気を保とうとするのは英語の振る舞い方のひとつであろう。

(15) 誤解 (英語のドラマだと思った割合: 41.2%)

- A: おいくらでしょう。
 B: いやあ、いいです。誰だってこのくらいのかすり傷は治療できます。
 A: ご親切様に。何かの時にはお返しができるといいのだが。
 B: ええ、できますよ。お宅の誰かがかすり傷より重い病気になったら治療させて下さい。
 A: そういうことは起こらないことを願いますが、もしそうになったら、きっとあなたに頼みますよ。
 B: ああ、済みません。縁起でもないことを。
- A: How much do I owe you, doc?
 B: Oh, there's no charge. Anybody could have cleaned that scratch.
 A: Well, It's very kind of you. Hope I can returned the favor.
 B: Well, you can. If somebody in your family gets anything more serious than a scratch, you can let me treat them.
 A: Well, let's hope that never happens, but if it does, I guarantee that you'll be the doctor.
 B: Ah, I'm sorry. That wasn't called for.

誤解や行き違いが生じた時、言い訳を先にするよりは、まず謝っているのがこの場面である。「お返しをしたい」とAに対して、Bは「Aの家族の誰かが重い病気にかかったら治療させてください」と言って一瞬、Aのひんしゅくを買う。しかしすぐに失礼なことを言ったとわかり誤解を解いている。また治療費を尋ねるAに対してBは必要ない旨を告げるが、Bはすぐに「ご親切様」とその申し出を受け入れている。日本語の場面なら何度か支払おうとするであろう。しかし、正答率は拮抗しており(英語のドラマだと思った割合は41.2%)、これは日本語訳の中の「縁起」と言う言葉に引っ張られたせいだと思われる。すぐに申し出を受け入れることが英語的だということは次の(16)で伺うことができる。

(16) 招待 (英語のドラマだと思った割合: 70.9%)

- A: ところで、先生。金曜の夜でもあなたと奥さんを夕食に招待したいんですが、お暇でしょうか。
 B: さあ、どうだったかな。
 C: 考えるまでもないわ、〇〇(BのFN)。お付き合いのカレンダーはぜーんぶ真っ白ですよ。
 A: 来ていただけると本当に有り難いのですが。上の息子も喜びますよ。医者志望なんでね。
- A: Ah, doctor. I was just wondering...are you and your Mrs. free for supper on Friday?
 B: Well, I don't know. I...ah...

- C : Oh, just off hand, I'd say our social calendar isn't entirely booked, Caleb.
 A : We'd really enjoy the company, especially my oldest son, he's got his heart set on being a doctor.

これはBとCの夫妻がAに夕食に招待されている場面である。暇かどうか尋ねられBは少しもったいぶった態度をとるが、奥さんのCはあっさり先約は何もないことを素直に話し、夫妻は招待を受けている。英語のドラマを基にしたと思った割合は70.9%であった。日本語の場面なら招待を受けるときにもっと恐縮するのが普通だとおもったからのようである。このように同じような行動に対して文化が異なると若干ことなった受け答えをすることはふだんよく観察されることである。

(17) 約束 (英語のドラマだと思った割合: 40.0%)

- A : 喜んで伺いますよ。
 B : よかった。7時はどうですか。
 A : ええ、それでいいです。有り難うございます。
 B : じゃ、その時また。
 A : 有り難うございます。

- A : Oh, we'd enjoy it very much.
 B : Oh, good. How about seven o'clock?
 A : That would be fine, thank you.
 B : All right. See you then.
 A : Thank you.

この場面は上記の(16)のあとに続く場面であるが、夕食に招待したあと約束の時間を決めている場面である。とくに振る舞い方の違いは出ていないようで、予想したとおり答えは英語のドラマを基にしたと答えた割合は40.0%、日本語のドラマを基にしたと答えた割合は56.4%で大きな差は無かった。

(18) 争い (英語のドラマだと思った割合: 49.1%)

- A : 先生、今〇〇 (Bの奥さんのFN) の様子を見ました。変なんですけど。すぐ来て下さい。
 B : だめだ。女房には触らせない。
 C : 〇〇 (BのFN)、心配して来てくれたんだぞ。
 B : あんな奴には女房は触らせない。
 C : 自分の憎しみのために、赤ん坊と奥さんを犠牲にするのか。この人は医者なんだぞ。
 B : だめだと言ったらだめだ。

(殴り倒す)

C : さあ、お願いします。

A : Doctor, I just checked Jenny. She isn't doing well at all. You'd better come in.

B : No, he is not to touch her.

C : Nathan, he is willing to help.

B : No, nigger's going to touch my wife.

C : Listen to me. Your hatred is going to cost that baby's life, maybe even Jenny's. My God, man, he's a doctor.

B : I said, "no"!

(C knocks down B.)

C : All right, doc. Go on in.

この場面は、偏見のため自分の身重の奥さんを診察させないBに対して、Cが力づくで診察を受けさせる部分である。やはり具体的に特定できるような文化な振る舞い方が出ていないためか、英語のドラマを基にしたと思った割合と日本語のそれとは、それぞれ49.1%と43.6%で拮抗していた。

(19) 言葉使い(その5)(英語のドラマだと思った割合: 47.3%)

A : あなた、素晴らしかったわ。誇りに思うわ。

B : ここを出て行こう、〇〇(AのFN)。

A : 何を言ってるの。

B : ここを出ていくんだ。

A : 〇〇(BのFN)だって、どうしてなの。あなた立派にやったのよ。〇〇(患者のFN)と赤ちゃんの命を救ったんじゃない。

A : You were remarkable. I am so proud of you.

B : We are leaving here, Mattie.

A : What did you say?

B : I said we were leaving here.

A : Caleb. I don't understand. You did brilliantly. You saved Jenny's and her baby's life.

実はこの場面が筆者が予想していた結果と一番食い違っていた例である。妻であるAが夫をいかに誇らしく思っているか伝える場面である。「誇りに思ってるわ」や「立派にやった」などということはあまり日本の夫婦間では口にしないと思われる言葉であるので、英語のドラマを基にした場面であると答える割合が多いと予想したのであるが、実際は47.3%にとどまり、中でも一番拮抗した割合になっている。この理由はわからないが、A英語の基の台詞であるWhat did you say?を「何を言ってるの」と日本語らしく訳したことが影響しているのではない

かと考えられる。

(20) 受け止め (英語のドラマだと思った割合: 54.5%)

A: それでこの席で○○先生 (BのLN+T) に謝罪したいと思ったんです。奥さんの○○ (Bの奥さんのFN)、町の人々にも、済まないことをしました。○○ (BのFN)、こんなことを頼む権利はないんだが、この町はあなたを必要としている。もう一度チャンスを与えてはくれないだろうか。

B: 先生、だれでも何らかの偏見は持っていますよ。私も同じです。町が私を必要とするなら、本当に必要としてくれるなら、残りますよ。

A: So I want to publicly apologize to Dr. Ledoux, to his wife, Mattie, and to all of you for bringing it about. Caleb, I have no right to ask this of you. But this town needs you. Give us a chance to show you how much.

B: Well, doctor, we all have some prejudice. Believe me, we do. But if this town needs me, I mean, really needs me, I'll stay.

この例では英語を基のドラマと考えた割合は54.5% (日本語は38.2%) でやや英語の割合が高かった。町を出ていこうとしているBに対してAは謝罪しながらも、「権利」、「チャンス」と言う言葉を用いて情に訴えるよりは、むしろ「町はあなたを必要としている」と論理的な説明を試みている。これらはどちらかというと言語的な説得方法であろう。また謝罪を素直に受け止めているのも英語的な発想だと考えられる。

以上、20の場面について話の展開に従い、英語のドラマを基にしたと思われると答えた場面と、日本語のドラマを基にしたと思われると解答した場面のそれぞれの理由を検討してきた。英語のドラマを基にしていても、日本語の訳だけでは英語のドラマとわかりにくい場面もあることがわかった。また英語のドラマを基にしたと解答したものの中でその割合が70%以上のものは、(2)いとまごい (89.1%)、(14)のユーモアを使用した場面 (85.5%)、(12)言葉使い (ご立派よ) (83.6%)、(8)言葉使い (しゃれ)、(1)依頼 (ファーストネームの使用) (74.55%)、(7)言葉使い (公平) (70.9%)、(13)言葉使い (公平) の7場面であった。やはり特別な言葉使いや公平を旨とするような英語的な発想法、畏敬の念というよりは親しみを全面に押し出すファーストネームの使用、ユーモア的な会話などが、たとえ日本語に訳されてはいても英語のドラマをそれと認識させる要因になっていることがわかる。

5. まとめと課題

英語のドラマには英語の論理と発想法があることがわかったし、それは、かなり多くの場合、たとえ翻訳されていても、容易に認識されうるものである。ただし、場面や項目によってその認識の度合いは微妙に変わるものである。反省としては自然な日本語の訳になるように努力し

たが、日本語の訳が微妙に結果に反映されることがわかった。また談話を重視するのはいいが、あまり長く引用すると焦点がぼやけてくるので注意が必要である。英語と日本語には「あのう」とか“well”などの空白補充語が存在するが、その取り扱いにも注意する必要がある。「あのう」という語を入れただけで日本語的な会話になることもありうる。さらに今回はひとつのドラマから重要と思われる場面を選んだが、同じ項目の場면을いくつか集めなければ、本当にそれぞれの項目が英語的か日本語的かは断定はできないであろう。また、本研究は英語を学ぶときにも大いに考慮されなければならないことがらを扱っているし、これからの英語教育に求められていることでもあり、これらの知見をどのようにカリキュラムに反映されるかはこれからの課題である。